

大学生になったのだから〇〇してほしい！

西川伸一

①鈴木邦男（2010）『鈴木邦男の読書術』彩流社。

大学生になったのだから、本をたくさん読んでほしい（だから、このブックガイドもあるのだが）。本書のサブタイトルに「言論派「右」翼の原点」とある。筆者は右翼団体「一水会」の最高顧問である。とはいえ、本書は読者を右翼思想に洗脳しようなどというケチな了簡から書かれたものではない。

冒頭に「自分ではもう右翼も左翼も超えたと思っている。（略）読書の力によって、左右の「翼超え」が出来たと思う」とある。読書にける筆者の執念は、まさに「体を張った」感があり、すさまじい。「ノルマ式読書法」と称して、1か月に30冊を読破するノルマを自分に課している。「こうでもして自分で自分の尻を叩かないかぎり、読書など出来ないものである」。

月に30冊となると、本代が当然かかる。「そこで考えた。ゼイタクはしない、服は買わない。酒は飲まない。だが、これだけでも本代はうかない。そこでメシを減らすことにした」。「一食や二食の食事代しかポケットになくそれでどうしても欲しい本があった場合は、迷わずに本を買うことにしている」。「ともかく本でも読むしかないという時間を持つことである」。たとえば、「人と待ち合わせをしている時なら、一時間前位に行って読書する」。これなら遅刻もしないので、一石二鳥だ。

読書中の本の具体的な「汚し方」も伝授してくれる。「あとで必要があった場合、すぐに探し出せるようにしておくことである。そういう考えから、もっぱら赤のサインペンを愛用している」。これで線を引いたり印を付けたりするのだ。資料は汚して読むのが鉄則である。さっそく君もこの本からはじめてみよう！

②大野裕之（2015）『チャップリンとヒトラー』岩波書店。

大学生になったのだから、映画をたくさん観てほしい。「映画を見ない人生より、見る人生の方が豊かです」（阿奈井文彦、2006『名画座時代』岩波書店、165頁）という映画館主のことばもある。若いうちに映画をたくさん観ておくことは、きっとその後の人生への滋養になろう。中でもチャップリンの映画には、人

生のすべてが凝縮されていると私は思っている。

筆者は日本におけるチャップリン研究の第一人者である。チャップリンは1889年4月16日にロンドンで生まれている。その4日後の20日にヒトラーがオーストリアのブラウナウ・アム・インで産声を上げた。前者は喜劇王として映画を通じて世界中の人々に笑いと希望を与えた。後者は独裁者としてヨーロッパの人々を悲劇のどん底に陥れた。絶滅収容所はその極致だ。2016年に日本で劇場公開されたハンガリー映画「サウルの息子」を観よ！

本書は、生年月日が近いばかりか同様のちょび髭までたくわえた両者を、映画「チャップリンの独裁者」(1940年)の製作過程、作品分析を通して対比的に描いていく。ちなみに、両者の髭の謎解きもおもしろい。

この映画で、チャップリン扮する主人公がカメラに直接訴えかける異例のラストは、「世紀の6分間」とよばれる。本書によれば、このシーンのために、残されているだけで1000枚以上のメモなどをチャップリンは書き付けている。これまた有名な、独裁者ヒンケル(ヒトラーを模している)の地球儀の風船とのダンスのシーンは、一挙手一投足まで脚本に克明に記されていた。

果たして、当のヒトラーはこの映画を観たのだろうか。それは読んでのお楽しみ。その前に、君自身でこの映画を観てね！

③佐々木健一(2014)『論文ゼミナール』東大出版会。

大学生になったのだから、受験勉強とは違う勉強をしてほしい。言い換えれば、入試に受かるための勉強ではなく、興味をもったことを自分で調べて理解する勉強である。その集大成として、4年生になって卒業論文を作成する。この期に及んで、論文の「お作法」がわからないでは困る。

いまのうちから、論文の書き方を身につける訓練をしておこう。「です・ます」調でわかりやすく書かれている本書は、そのための格好の道案内になる。

筆者は「論文を書くことは技術だ」と主張する。「論文については、ことばを話すことができるし、メールのメッセージを書くことができるのだから、簡単に書ける、と思い込んでいるのではないのでしょうか。実際に取り組んでみれば、これがそう簡単にはいかない、ということがすぐにわかります」。

より踏み込んで、筆者は「「である調」で断定する」ことが論文だという。「です・ます」調で語るときには、聞き手あるいは読み手に話しかけるという体勢をとっています。(略)これに対して「である」は読者の意識をもちません。(略)

「である」調で書くということは、断定する、ということです」。一方、筆者は「という考え方もできるのではなかろうか」という言い回しをするのは「臆病なひと」であり、「なまくらな言い回し」だと手厳しい。こんな逃げを打っても「批判されるときには批判されます（略）断定するほうが潔い、というものです」。

私のようにおやじになってからでは手遅れだ。君こそいまから潔い論文を書くクセを会得しよう！